
2015年8月6日 楽習会・歴史講座「天狗党の乱始末」実施報告書（岡田 泰典） 150818

郷土博物館館長の小松徳年氏に天狗党の乱の全貌の概略をご講演いただいた。

安政5年(1858)、日米修好通商条約を独断調印した幕府に対し、朝廷（孝明天皇）はその専横を呵責、横浜鎖港など攘夷推進を強く要求。実行せぬ幕府に業を煮やし、水戸藩主徳川慶篤(上洛中)に江戸に戻り、将軍名代としての横浜鎖港を下命。慶篤は自信なく、任務放棄。

それではならじと立ち上がったのが若干24歳、藤田小四郎ら。攘夷決行を目的に筑波山に挙兵。武田耕雲斎（63歳）は懇願され已む無く首領に。これが尊王攘夷派の天狗党。この動きに反対したのが講道館学生（諸生）と保守門閥派の連合体で佐幕派の諸生党。

水戸藩は内乱状態に。幕府は近隣諸藩に天狗党討伐令を発令。幕命を受け、定府中の慶篤は宍戸藩主松平頼徳に事態収拾を依頼したが、後方に榊原新左衛門ら尊攘鎮派と武田ら尊攘激派が付従う鎮撫軍の水戸城入城を諸生党は拒否。那珂湊攻防戦で頼徳は幕府軍に投降。次いで榊原ら尊攘鎮派も降伏。武田ら尊攘激派は脱出し、主筋の同志統領と仰ぐ禁裏守衛総督徳川慶喜を頼ろうと西上決定。寒風すさぶ中山道をはるばる250里、各所で小競り合いしながら踏破。

しかし、敦賀近辺に至った時点で、頼みとする慶喜がなんと天狗党追討軍の統領であることを知り、万事休す。降伏。血気にはやる若者の軽慮浅謀か純粹さか、見方は多岐に亘ろうが、歴史の流れの中で、新たな時代を開く過程での碑の一つと感じた。（岡田 泰典 記）
